

## カースト・ダリト問題の作品と雑誌 ‘Hans’ (86-88)

石田 英 明

### Works on the Caste and Dalit Problem Appearing in the ‘Hans’ (86-88)

Hideaki Ishida

本稿はヒンディー語の月刊文芸雑誌 ‘Hans’ (1986年から88年まで) に掲載されたすべての作品のうち、カースト問題やダリト問題を扱った作品を取り上げ、その内容を紹介し、一部に寸評を加えた研究資料である。前号で予告したように、資料が揃ったので創刊号 (正式には復刊号) から順次作業を進めた。その他の注意事項については前号 (本紀要第43号) を参照されたい。

1986年

H1986-8-5 (巻頭言) Pratyagat (復刊の辞) Rajendr Yadav

内容 —— (関係部分) 世界的には白人黒人の人種差別があり、インドには不可触民問題がある。両者はほぼ同じ意識構造から生まれている。この ‘Hans’ においては常に、特に小説などの作品を通してこの闘いにも注目していきたい。〔評 —— 復刊の辞として復刊の意義、Premchand の思想の継承などを述べた後、この号に掲載された作品の紹介と今後の編集方針を述べる中で上のよう書いた。Dalit という語はなく achut という語を使っている。他の多くの社会問題にも言及しているが、この問題に特に創作作品を通して取り組む姿勢を見せた点に特徴がある。〕

H1986-8-72 (書評) Asprishyata ke Yatna-kendr (不可触性の苦悩の中心) Arcna Varma

内容 —— ① P.I.Sonkamble の Yadon ke Panchi (原作 Marathi)、② Daya Pawar の Achut (原作 Marathi)、③ Jagdish Candr の Dharti Dhan Na Apna、④ Rameshcandr Shah の Kissa Gulam、⑤ Giriraj Kishor の Parishisht、以上の5作品の比較。①と②は作家が自己体験を書いているもので、率直な描写が読者に感動を与える。対照的に④と⑤は作者の想像力が作り出した Harijan の物語で、現実的な Harijan を描いたものではない。③は現実的な Harijan の人生を描いている。〔評 —— 適切な評価である。〕

H1986-10-12 (インタビュー) Avargi men Hamne Zamane ki Sair Ki... (放浪のうちに時代を旅し

た...) Vishnu Prabhakar (聞き手Padma Sacdev)

内容——(関係部分) Prabhakar の生家では浄不浄のことに厳しかった。不可触民に触ったりすると、容器に金(キン)を入れた水を体にふりかけて浄めた。ムスリムが来るともてなしたが、後で食器を火で浄めた。自分達がムスリムの家を訪れるとヒンドゥーの店から食べ物を取り寄せた。家は Arya Samaj の影響が強かった。当時、Shuddhi 運動が行われていたが、Shuddhi の後も不可触民扱いされるので、Shuddhi された人々は意味がないと言っていた。

H1986-10-16 (評論) Harijan Kahne ka Matlab (ハリジャンと言うことの意味) Shailesh Matiyani

内容——M.K.Gandhi は Harijan という語を時代の必要に応じて一時凌ぎに作ったが、現在では定着して vote bank として政治的に利用され、インド社会の分裂を助長している。Harijan 枠に入る人達はかつてのバラモンのように、Harijan というだけで特権的便宜を与えられ、Savarna と衝突するので、インド社会はまとまらない。[評——Harijan という語で不可触民のことを言い換えても実態に変化がなければ無意味であるという指摘は正しいが、カースト制を解消し不可触民をどう豊かにするのかについての具体的な提言はなく、Harijan の無差別的優遇はインド社会を分裂させるだけだから良くないと述べるのは、Savarna のみを擁護する偏った意見である。]

H1986-10-41 (短編) Ghatna (出来事) Vishvjit

物語——28軒の貧しい Mahato だけが暮らす小村(UP 東部?)。殆どが農業労働者。ある家の娘婿が突然やって来たので、もてなしをするのに大童だが、皆嬉しくもある。[評——貧しい人々の生活の一部を切り取って見せた作品。カースト問題はテーマではない。]

H1986-11-29 (短編) Len (担当区域) Citra Mudgal

物語——Jamadarin の Mahindari は新興住宅地のアパート群の一角の清掃を担当している。彼女の夫はリキシャ夫だが、窃盗団の内輪もめの巻き添えを食って重傷を負う。Mahindari は仕事を休んで夫の看病をし、警察の事情聴取にも応じて犯人逮捕に協力する。窃盗団は彼女が警察への協力をやめれば5000ルピー与えよう持ちかける。彼女は一旦断るが、夫が働けない体になったと分かり、裁判に付き合う面倒や、新しい len の占有権の購入のことも考えて、窃盗団の話に乗る気になる。[評——高層アパート地域における清掃労働者の生活を描いている。テーマはカースト問題ではなく、犯罪捜査で警察に協力するより、実利を取る方を選ぶ心理やその背景を描くことにある。]

1987年

H1987-1-11 (読者の手紙) ① Purane Shabdon ke Nae Arth (古い語彙の新しい意味) Asimkumar Ansu ② Ve Bare Dom Hain (彼らは大物のドームだ) Tunnulal Ratna ③ (無題) Vedprakash

Tripathi

内容——いずれも Matiyani の意見 (H1986-10-16) に対するもの。①は Matiyani に賛成。Harijan という語が彼らの社会的上昇を妨害し、留保制が社会に亀裂をもたらしたとする。②も賛成。③は Harijan を上昇させるための具体的な提言がないとして Matiyani を批判。〔評——①は留保制に反対する人々の典型的な意見。③の批判は適切である。〕

H1987-1-29 (短編、マラーティー語) Pankh (羽) Daya Pawar

物語——Dalit の少年が学校にひどく派手な服を着てくる。経済的に頼っている親戚の叔父が買ってくれたもので嫌とは言えない。学校では校長らが激しく差別する。〔評——貧しく教養とは無縁の家庭環境と社会の差別の中で生きる Dalit の少年。〕

H1987-1-68 (短編) Bhukh se Maut (餓死) Rajendr Kumar Mishr

物語——田舎の Harijan 家族 5 人が餓死した様子が新聞に報道される。政治家、官僚、記者らはいずれも自分の利益のためにこの事件を利用しようとするばかりで、事件を真剣に考えようとする者はいない。

H1987-3-67 (短編、カンナダ語) Bhukh (飢え) Devnur Mahadev

物語——農村の日雇い仕事で暮らしている人々の生活の様子。飢えを凌ぐため金貸しの倉庫から落花生を盗んできて家族全員で食べる。翌日警察が踏み込むが、盗んだ証拠が残っていない。〔評——描かれた人々が指定カースト (または指定部族) であるという具体的な記述はない。しかし、農村の日雇い仕事で生活していること、死んだ牛の肉を食べると話していること、町の食堂でこの人々への給仕を巡って警察が出動する騒ぎになったことなどから、この作品に描かれた人々は指定カーストである可能性が高い。〕

H1987-5-60 (短編) Adamkhor (人食い) Rupsimh Candel

物語——借金のために祖父の代から金貸しの家で実質的に束縛労働を強いられている Sarju はある日積年の恨みを晴らす機会に巡り合うが、ためらっているうちに逆に借金を増やされ、ついに逆上する。〔評——Sarju が指定カーストであるという記述はないが、彼の貧しさ、祖父の代から束縛労働を強いられているなどの点から、Sarju が指定カーストである可能性は高い。〕

H1987-6-50 (詩) Adam Gondvi ki Gazalen (アダム・ゴンドヴィーのガザル) Adam Gondvi

内容——(末部抄訳) おのれの死体を肩に担ぎ、都市の人々よ、我々は村からやって来た / この花壇の花は私の赤い血に染まっている、この厳然とした事実をあなたはなぜ隠すのか / 裸になるのなら我々も引けは取らない、あなたは好きで裸になるが、我々は悲しみに肌を曝す / 権

力の棺を火葬場へ運ぶ者は、餓死を懐に抱きしめてやって来た...

H1987-6-53 (短編 ベンガル語) Devshishu (子供神) Svarn Mitr (Utpalendu Cakravarti)

物語 — Kailya (不可触民) の妻が奇形児を出産した。村の祈祷師に相談するとその娘婿はうまく始末してやると言って20ルピーでその子を引き取った。7年後のある日、町に靈験あらたかな「子供神」が来ていると聞き、生活苦から逃れたい Kailya がご利益を受けに行くとそれは奇形児の我が子だった。祈祷師の娘婿が「子供神」に仕立て上げ金儲けをしているのだった。家に戻った Kailya は妻にもう一度奇形児を生んでくれと言う。〔評 — カースト問題は主題ではないが、「不可触民」の子が信仰を集める矛盾について Kailya の疑問が述べられている。1979年出版の短編集所収の作品。これに基づく映画Devshishuの準備を作者は84年12月1日までに終えていた(次項参照)。〕

H1987-6-57 (短編) Bal Bhagvan (子供神) Svadesh Dipak

物語 — この少年 (バラモンの子) は脳に障害があり、わずかに理解する単語を繰り返し発音する特徴がある。飢えていたある時、息子の誕生を望む地主の前で「息子、団子」と繰り返し発音していると、その地主に息子が生まれたという知らせが届く。神の意思を告げる能力があるということになり、周りの者達はこの少年を「子供神」に仕立て上げ大いに潤う。腹いっぱい食べるようになった少年はやがて内臓に異状をきたし血を吐いて死ぬ。〔評 — カースト問題は主題ではないが、少年がバラモンの知的障害者であることで、特別な畏怖の目で見られるとしている。この作品は84年12月2日から85年1月5日にかけてヒンディー語週刊誌 Ravivar に連載された。前項の作品や映画より明らかに後の作品であるが、作者は映画がこの小説の剽窃であると裁判所に訴えたため話題になった。後日話し合いで解決した (H1987-9-6)。〕

H1987-6-67 (短編) Tiriya Carittar (女のふるまい) Shivmurti

物語 — Vimli は9歳の時からレンガ工場で働き家庭を一人で支えてきた。7年後の今日彼女は幼くして婚約した男の許へ惜しまれながら嫁ぐ。夫はカルカッタで働いているとかで、家ではやもめの舅と二人暮らし。淫らな欲望を持つ舅は Vimli の激しい抵抗にあうと、彼女をアヘンで眠らせて思いを遂げる。村人には Vimli が不倫をしたと嘘をひろめ、逃げ出そうとした彼女を捉えて村の Pancayat に掛け、有罪となった Vimli の額に烙印を捺す。〔評 — 舅のカーストは Mahato とされているので、いわゆる Dalit ではない。カースト問題の作品ではないが、カーストの機能と影響が随所に描かれている。〕

H1987-9-39 (短編) Mitti ka Madho (大馬鹿者) Nafis Afridi

物語 — Madho は親の代から Mangalu Pandit の家で束縛奴隷同然に働いている。バラモンを畏

れる素朴な若者で、村芝居に欠かせない芸達者でもある。Mangaluは権力欲が強く、性欲も旺盛で Dom の女と関係を持つことも厭わない。Mangalu の妻は夫の圧制に辛抱強く耐えてきたがついに焼身自殺する。Madho と親しい Gangi は裏手に住む若い後家で、Mangalu の家で女中のようになっている。Mangalu はある晩 Gangi を犯す。これを知った Madho は牛達に踏ませて Mangalu を殺す。バラモン殺人の罪にならぬようにしたのである。〔評——強欲なバラモンを描いた典型的な作品。Madho のカーストは不詳。〕

H1987-9-64 (短編) Niji Sena (私兵軍) Jaynandan

物語——ビハールの村。Caudharan カーストの大地主、少数の自作農、他は刈り分け小作（と農業労働者）という構成。刈り分け小作はほとんどが「不可触民」ないし後進カースト。一部は地主と同じ Caudharan カーストもいる。小作の分け前などを巡って小作人と対立した地主は Caudharan カーストの小作人を抱き込んで他との分断を図り、さらに彼らを私兵化する。収穫の奪い合いからついに地主側は「不可触民」地区を襲撃して焼き払い、43名を殺害する。しかし政府の調査団が数ヵ月後に出した結論は失火による火災というものであった。〔評——地主側がカースト制も利用して巧妙に利益を拡大するのに対し、「不可触民」らの抵抗は弱い。「不可触民」の指導者 Sivan が抵抗を途中で放棄したため地主側の襲撃を招く。この設定の意図は理解しづらいが、Jaynandan の作品にはこういう設定や人物がしばしば描かれる。〕

H1987-10-12 (評論) Malkana Rajput Musalmanon ki Shuddhi (マルカーナー・ラージプート・ムスリムの清浄化) Premchand

内容——Arya Samaj の Shuddhi (清浄化=再改宗) 運動はムスリムの不信感をあおり、独立運動に利益とならない。運動をしている人々に「不可触民」差別をなくす気がないので、再改宗した人々も結局もとのムスリムに戻ってしまう。Malkana 達も同じ道をたどる可能性がある。〔評——1923年にウルドゥー語の雑誌 Zamana に掲載された文章。(参照 Vishnu Prabhakar H1986-10-12)〕

H1987-10-62 (短編) Natak (劇) Shyam Jangir

物語——私はカレッジの教授。戯曲を書いて学生に演じさせている。今回の戯曲は地主に抵抗する束縛奴隷を描いたもの。準備の段階で、ビハールで実際に地主に抵抗する革命的組織の活動家の青年と知り合う。その青年の家族は皆地主勢力に殺されていた。その地主勢力の背後に州の大物政治家がおり、今日はその政治家が観劇に来る。青年は暗殺を目論むが、警察に捉えられる。青年を援助できなかった私は自分の無力さに涙を流すのみである。〔評——ビハールの農業労働者の闘いを側面から描いている。Dalit という語は使われているが、カースト問題としては描かれていない。〕

H1987-11-52 (短編) Halipa (奴隷労働) Yadavendr Sharma 'Candr'

物語——CandiyaはJogiカーストの青年。幼くして両親を失くし、親戚に育てられるが、奴隷のように扱われ、ついに飛び出す。放浪中に同じカーストの娘と知り合う。その娘と結婚するには3年間その家で奴隷労働をしなければならない。それはやがて逃げ出すであろう若者に只働きをさせようとする娘の父の計略で、今まで何人もそうして只働きをさせてきたのだが、今回は娘がCandiyaに惚れ込み、二人は駆け落ちする。〔評——Bikaner近辺のJogiカーストの結婚に関する風習を描いているが、やや興味本位である。カースト問題の作品ではない。〕

H1987-11-88 (書評) Kisan Andolan : Pahari Uncaiyen (農民運動：パハール地域の高揚) Vir Bharat Talvar

内容——Shekhar Pathak著 Uttarakhand men Kuli-Begar Pratha の書評。本書の内容を紹介し、Awadhの農民運動と比較している。〔評——Uttarakhand地方のKuli-Begar反対運動においてShilpkarがイギリス側に利用されたこと、またこの運動とAwadhの農民運動の双方において最も苦しい立場にある「不可触民」らが運動の前面に登場しないことについて触れているが、分析までには至っていない。〕

1988年

H1988-1-10 (評論、英語) Ram aur Krishn ki Gutthi (ラーマとクリシュナの謎) Bhimrao Ambedkar

内容——Valmikiの Ramayana (VR) に基づきラーマについて8つの点で批判している。1) ラーマはKaushalyaとRishya Shringaの間に生まれた。2) ラーマを支援する猿軍を作るため、神々は半神人から動物に至る種々の女やメスに子を産ませて猿軍を作った。3) Bauddha Ramayana ではラーマとSitaは兄妹である。(VR) ではSitaはJanakaの養女であり、実子ではない。ラーマとSitaは兄妹であったとする方が自然であり、当時のアーリヤ人では兄妹の婚姻は普通だった。4) ラーマにはSitaの他にも側室が大勢いた。5) 猿王Baliの殺害は卑怯である。6) Sitaに対する度々の仕打ちは利己的で、人間味が感じられない。7) 政治はBharataに任せきりで、ラーマの仕事は午前はお祈り、午後からは遊興三昧であった。8) ラーマが庶民の訴えを聞いて行動したのは一度きりで、それはShambukaの殺害だった。〔評——Ambedkarの著作 Riddles and Hinduism の一部をUsha Mahajanが要約したもの。Krishnaについての部分は省略されている。この文に対する批判は88年6-7月合併号に多数掲載されている。〕

H1988-1-20 (評論) Main Rakt Shuddh Arya ! (私は純血のアーリヤ人だ!) Gajanan Madhav Muktibodh

内容——自身の著作 Bharat : Itihas aur Sanskriti がMP州政府により発禁処分を受けたのは主に

Rama と Krishna を非アーリヤ人との混血の子孫としたこと、Jain 教の Vardhamana らを非アーリヤ系部族出身としたことによる。しかし、これは多くの学者の説に従って述べたもので、自分の独創ではない。〔評—— 発禁処分は1962年9月19日に出された。〕

H1988-1-56 (短編) Morca (見張り所) Punni Simh

物語—— 元々先住部族 Sahariya の土地であった地域を30年余りの間に Patel らが殆ど取り上げてしまい、Sahariya は半奴隷的な労働者に転落している。青年が中心になって奉仕労働を拒否する抵抗を始め、弾圧を受けても、抵抗を続ける。〔評—— 抵抗はあまり組織的ではないのに継続する。一方 Patel の弾圧も徹底的ではない。いずれも中途半端で現実感がない。〕

H1988-1-73 (短編) Kalu Bimar Nahin Hai (カールーは病気ではない) Vinod Mishr

物語—— 代々地主の農業労働者をしている男が息子には別の人生をと願ってこっそり連れ出し、町の食堂の小僧(呼び名は Kalu) にしてもらう。20年後 Kalu は成長し、結婚して村には息子もいる。その子を学校に行かせるため引き取ったが、ある日彼が少し出かけた間に食堂の主はその子に皿洗いをさせた。それを知った Kalu は食堂の主が村の地主と同じに見え、怒って食堂をやめ村に戻った。〔評—— 何の展望もなく、作者の意図は不明。カーストは示されていない。〕

H1988-2-24 (短編) Dubhashiya (通訳) Jitendr Bhatiya

物語—— Bihar の村出身の私は大学を出てムンバイで働いている。村では村を牛耳る金貸しの Sav に父を始め貧しい者や「不可触民」達が殺され財産も奪われるが、反撃できない。私は何とかして復讐したいが、田舎からは帰ってくるなという手紙が来る。Bihar の旅行記を書いたある作家に意見を求めに行くと、言葉は勇ましいが、中味はない。そういう人物と決別し、私は田舎に向かうことを決意する。〔評—— 「私」のカーストは不詳。言葉だけの作家に相談しようとする自分の日和見的态度に気づく過程を描いている。〕

H1988-2-35 (短編) Tin Kilo ki Chori (三キロの女の赤ちゃん) Mridula Garg

物語—— Shardaben は村の改良事業員 (gramsevika) で主に保健事業を担当している。出産に立ち会い赤ん坊の体重を記録する。この村は貧しく、最近では共同酪農を始めたが、生活は苦しい。赤ん坊が生まれても産婦はすぐに働かねばならず、折角の子供を死なせてしまうこともある。今日は3kgもある立派な赤ん坊が生まれたが、女の子でしかも三女なので誰にも歓迎されない。学校の先生の妻が熱を出したので診てほしいと言われ、行くと妻は Shardaben に助けてとすがり付いてくる。Shardaben は Vankar という不可触カースト民なので戸惑うが、自分が頼られていることを知り自信が湧く。今日生まれた3kgの女の子も元気に育ててほしいと思う。〔評—— 村落部における女性の地位向上やカースト差別の解消に gramsevika の地道な活動が貢献していること

を女性の立場から描いている。]

H1988-3-34 (短編) Sthaniy Samacar (ローカルニュース) Pranav Kumar Vandyopadhyay

物語 — この村は Bhima Thakur が牛耳っていて、逆らう者は殺される。Gujar はカーストごと村から去ったし、Ahir も反抗できない。身持ちの悪い甥の不始末も難なく処理してしまう。[評 — 田舎を牛耳る Thakur の有様を描いている。女性関係ではカーストを問題としない Thakur の暮らしぶり。]

H1988-3-43 (短編) Dhaga Jyun Tute (糸が切れたら) Saroj Kaushik

物語 — 織工の Ramdas は手織り機の伝統を伝える職人。息子夫婦をなくし、孫娘と二人で暮らしていた。やっと孫娘に婿を迎えたが、婿は手織りに見切りをつけ電動織機の工場で働く。[評 — 機織りの世界の変化を描いた作品。カースト制は主題ではない。]

H1988-8,9-5 (巻頭言) Rajendr Yadav

内容 — (関係部分) Agnivesh 師とその 'Shudra' 仲間が Nathdvara 寺院に立ち入るのを Rajasthan 政府が差し止めた決定は時代に逆行するものである。

H1988-8,9-27 (短編) Nind (眠り) Malcand

物語 — 町の名士である商人 Chogmal は最近二ヶ月余り眠れなかった。町の図書館に出資者の名前を冠する会議室を増設し、さらにその人物の銅像も建てる予定があり、Chogmal は当然自分がその出資者になると思い込んでいたが、思いがけない対抗馬が現れた。それは「死んだ動物の皮を剥いで金儲けをしている」Sansi 族の Mirciya で二人の息子がイラクで稼いでいるのでの上がってきた男である。出資者を二人にする案が有力となり、銅像も二人のが並んで建つことになる。ある晩 Chogmal は銅像の Mirciya が銅像の自分の首を絞める夢を見る。それ以来彼は不眠症に陥った。ところが出資者を最終的に決める前の晩に Mirciya が急死する。それで Chogmal の不眠症は嘘のように快癒したのだった。[評 — Chogmal は自称 Gandhi 主義者であり、普段人前ではカースト制に反対を唱えている手前、Mirciya を嫌っているそぶりは見せられない。]

H1988-8,9-35 (短編) Florens (フローレンス) Sharat Kumar

物語 — Florens は Anglo-Indian。父は三代目、母は二代目。中学生の頃父死亡。母はインドが肌に合わず移住を希望していたが、再婚して海外へ行く道が開ける。Florens は自活してインドに残る道を選び、Anglo-Indian の警察官と結婚する。しかし夫の暮らしぶりが合わず自殺する。[評 — Anglo-Indian の価値観の多様性が描かれている。アパートが容易に得られないなどの苦勞も紹介されている。]



H1988-8,9-50 (詩) Tumhari Jati Kya Hai ? (君のカーストは何だ?) Kumar Ambuj

内容——(訳) 君のカーストは何だクマール・アンブジュ?/ 君は誰の食べ物を食べ、誰の水を飲むのか?/ 選挙ではどの集団に投票するのか、事務所ではどのカーストで呼ばれるのか、誕生日の星座表にはどの Gotra が記入してあるのか、君の姉妹や娘はどこに嫁入りするのか/ 自分の宗教と家系について言ってみろ、祈りをするのはイスラム寺院かヒन्दゥー寺院かスィク寺院かそれともキリスト教会か/ 自分のでなければ父親か息子のカーストを言ってみろ/ 言ってみろクマール・アンブジュ、宗教暴動の時はどっちにつくのか、どっちの者の手で殺されるのか?

[評——単にカーストだけでなく、宗教についても訊いているので、Jati は「生まれ」の全てを指しているともとれる。]

H1988-8,9-67 (短編) Baingan-Vari (なすび畑) Prahlad Candr Das

物語——国政選挙に村長が立候補し、対立候補に Manjhi カーストの Bhikhu が立った。村長は警察を抱きこんで Bhikhu の運動員らを拘束する。村の低カースト層は今まで村長に投票してきたが、今回は内緒で Bhikhu に投票した。結果は村長が当選する。[評——Bhukhu は低カースト層が目覚めることを目的としているので、今回の選挙を成功と見ている。警察も巻き込んでいるが厳しいカースト対立などのない穏やかな選挙風景。]

H1988-10-31 (評論、英語) Amanavikaran ki Sthiti ko Badalo (非人間化の状況を変えろ) Palo Fraire

内容——非人間化は被抑圧者だけでなく抑圧者にも及んでいるから、両者を解放することが必要である。Dalit は人間性を回復することは抑圧者のようになることだと錯覚する場合がある。また「自由の恐怖」から Dalit のままであり続けたい思う場合もある。この矛盾する感情を克服しなければ Dalit を解放の闘いへと導くことはできない。[評——Paulo Freire 著 Pedagogy of the Oppressed の Arcna Varma による要約。]

H1988-10-62 (短編) Dastak (ノック) Ratan Varma

物語——材木の請負をしている Babu は森で働く労働者達の雇い主である。若い女達は Babu の目に留まることを求めている。Juthan の母は先代の主人のお気に入りであったが、娘の Juthan は今の主人の目に留まらない。折角のチャンスもあと一歩で逃してしまう。[評——描かれた労働者達の暮らしぶりから、彼らは低カースト民または先住民と思われるが、はっきりとは言及されていない。貧しい人々の価値観が生活の状況に応じて下降する様子を淡々と描いている。]

H1988-10-70 (短編) Kaho Ripudaman... (どうしたんだ、リプダマン...) Priyamvad

物語——Ripudaman は感性豊かな詩人である。父は皮なめし工場の職人。妹 Mumal は音楽教師。

皮革関係の職人はムスリムが殆どという地区でこの一家はヒンドゥーである。私は Ripudaman の友達で医学生。ガンジス川の川床復元運動からんで宗教暴動が仕組まれ、Ripudaman の父が殺される。私がアメリカに留学している間に妹 Mumal は警察官から暴行を受け結局自殺する。Ripudaman との連絡も途切れる。私は7年後に帰国し、市の死体安置所を統括する立場の役人になる。ある日ある安置所を視察するとそこの作業員は Ripudaman であった。彼は全くすさんでいて、狂ったように革命的な詩を口ずさんでいた。〔評—— Ripudaman のカーストは示されていない。Ripudaman と妹は高学歴であると思われるが、二人とも皮革産業のこの地域や自らを卑下するような態度ではない。Ripudaman は父の死により詩作の意味を見失うが、それまでのいささか高踏な趣味や思想を持つ人物という設定の背景は不明である。この家族の不幸は直接的には政治と宗教と権力によりもたらされ、Ripudaman もそのように捉えているが、彼自身は最後まで凶暴な現実には弄ばれる惨めな存在でしかない。現実との直接的な関わりが希薄な Ripudaman の設定に問題がある。カーストの視点が全くないのも気になる。〕

H1988-11-22 (評論) Sampradayikta se Kam Khatarnak Nahin Hai Kulvad (宗派主義に劣らず危険な家系主義) Prabha Dikshit

内容——ムスリムが団結するよう見えるのは宗教のためではなく、生活のためである。ヒンドゥーは全体で団結しなくても、家系やカーストだけでまとまって利益を確保しようとするのがあり、これは宗派主義と批判されることはない。しかし実際はこうした家系主義やカースト主義は宗派主義と同様に危険である。

H1988-11-73 (短編) Mati Pani (土と水) Ramdhari Simh 'Divakar'

物語——Bihar の村。Rajput とBhumihar の地主衆に対し、Mahato や Khawas カーストは殆どが小作や農業労働者である。Maujilal Mahato の息子 Sonelal は Mahato や Khawas の人々の援助を受けて大学を卒業し、副警視に採用される。地主の横暴に小さくなっていた人々は強い味方ができたと喜ぶ。Sonelal 自身学生の頃は地主と対決する正義漢であった。やがて彼は警視になる。村では相変わらず地主の横暴が続いており、小作人の指導者的存在であった農民が地主の Ranvijay Simh に殺される。犯人がなかなか逮捕されないことに業を煮やし、人々は Sonelal の父 Maujilal に圧力をかける。Maujilal は息子に会うため町に出掛ける。しかし息子の家には犯人である Ranvijay Simh が夫婦で逗留し、すっかり打ち解けていた。父親は出世した息子と厳しい嫁に気兼ねし、結局何も言えずに村に帰る。〔評——立場が変わると人柄がすっかり変わる様子を率直に描いた作品。〕

H1988-12-21 (短編) Tinke ka Tufan (草の葉の嵐) Alam Shah Khan

物語——乞食達の世界。Ghisu は手足が萎え、言葉も話せないが、その哀れさが却って物乞い

には好都合である。周りの者達が彼を利用しようとし、Ghisuは親分格の男と衝突し孤立する。そんな彼を若い女乞食のDamliが救い、二人は夫婦の契りをかわす。親分はDamliから稼ぎの一部を取り立てると共に関係も要求する。それに応じたDamliに裏切られたGhisuは現場に乗り込んで暴れる。〔評——カーストには一切触れていない。言葉は方言も混じって難解。〕

(2005年9月22日受理)